

〈資料紹介〉 高山房刊『唐詩選和訓（とうしせんききがき）』五言絶句編（上）

山 本 佐和子

書誌

関西大学図書館中村幸彦文庫蔵『唐詩選和訓』三卷三冊

尾題 「五言絶句（終）」

（請求記号：L24*1-1108*1-3）のうち、第一冊（資料ID：

奥付・刊記 なし。※備考、参照。

210193310）。

刊年 寛政二（一七九〇）年五月序跋（第二冊「七言絶句」末尾）。

種類 漢籍平仮名付訓注釈書（『經典余師』に倣ったもの）。

備考 高山房刊『唐詩選和訓』には、寛政二、五年初版（全三冊）、

形態 半紙本、袋綴じ、一冊。

文政六年再版（全四冊）がある。刊行順は次のとおり（「」

寸法 縦二三・三種、横一六・〇種。

は題箋で、「唐詩選和訓」に続く小書）。

丁数 序二丁、目録二丁、本文二十二丁。

寛政二（一七九〇）年 「五言絶句／き、かき」一冊、「七言絶句

外題 刷り題箋、「唐詩選和訓〈五言絶句／き、かき〉」^①。

／き、かき」一冊

見返し 「寛政庚戌新鑄／唐詩選和訓／江都書肆 高山房蔵」、魁星

寛政五（一七九三）年 「七言絶句／き、かき（続）」一冊

印あり。

文政六（一八三三）年 再版、「五言律詩 一」、「五言絶句 一二」、

内題 「唐詩選〈五言絶句〉」

「七言絶句 三」、「七言絶句 四」各一

作者 （内題下）「濟南李攀龍編選」

冊

（第二冊「七言絶句」末尾）「高英見聞筆記」

寛政五年の刊記がある「七言絶句／き、かき（続）」には、作者

〈資料紹介〉 高山房刊『唐詩選和訓（とうしせんききがき）』五言絶句編（上）

の小林高英の自筆跋があり、寛政初版の凡その成立過程が分かる。

寛政二（庚／戌）年（予）為童蒙訳／唐詩選五七言絶句、適会家

／事蝟集至七言之半不卒業而／梓之、今歳乘間復自七言之半／至

于終尺訳之刊而併於／前本為三卷矣

寛政五（癸／丑）季冬／高山坊 高英書（花押）

右の跋では、「三卷」と明言されており、再版の第一冊目「五言律詩」編は、再版の際に付け加えられたものと考えられる。

概説

本書の詳細な伝本調査や、日本語史資料としての性格、観察できる言語事象については別途報告することとし、以下概略を述べる。

『唐詩選和訓』は、天明六（一七八六）年以降天保期まで版行されて広範な支持を得た『經典余師』——平仮名を用い、頭書には書き下し文、本文には訓点付きの漢文に続けて双行で解釈を記すことにより、漢文の素読独習を可能にした画期的な漢籍注釈書に倣った早い例とされる（鈴木二〇〇五）。

版元の高山房小林新兵衛は、和刻本『唐詩選』の版權をもち、関連書籍を数多く出版している（村上二〇一三など）。中でも、四代目小林新兵衛高英は、『唐詩選国字解』（天明二年刊）や『唐詩選画本』（天明八年刊）等のベストセラーを刊行したことで知られて

いる。本書は、高英が自身の著作であることを序跋で初めて明らかにした本である。

(1) 予は浅陋にして、学びたる事はなし。実に途に聞て途に説のたぐひなるべけれど、かれこれの説をきき、国字解など読て心に髣髴たる事を書き、師につき学びがたき人のために記すなり。

〔五言絶句〕冒頭「唐詩選和訓序」部分、濁点・句読点を私に補う）序では、「師につき学びがたき人」（引用箇所とは別に、「寒郷師友乏しく、又は職業により、師につき書を読みがたき人」とも）

のために、学者ではない書肆の店主が、学者の講義を聴いたり、国字解を読んだりして書いたという作成の経緯が記される。書名の「和訓」も、題箋や表紙見返しの際の振り仮名によると、「きゝがき」と読むべきものらしい。初版本二冊目末尾には、「高英見聞筆記」の署名もある。

本書は、『經典余師』や他の類似の注釈書とは異なつて、口語的な文体が用いられるが、右の作成経緯が深く関わっていると考えられる。例えば、敬語を用いずに事物を説明する口語的な文章も見られる（③・⑥の詩解等）。文政再版は、明治印が確認でき、早稲田大学図書館蔵本（再版本）は、坪内逍遙旧蔵とされる。近代以降への影響をも想定すべき資料である。

今回、関西大学図書館中村文庫蔵本を底本に本書を翻刻したのは、

通俗的な学習書という性格のためか、公立図書館・大学図書館における所蔵が少なく、特に初版三冊が揃う例は稀であるためである。

再版本は覆刻ではなく、初版本と全体の構成・頁の配置まで類似して本文もほぼ同文だが、仮名字体や仮名遣、一部の漢字表記が異なる^③。総ルビに近い詩解の振り仮名として示される語が違う例もある。漢詩に付される訓点も、捨て仮名の使用は初版のみであるなど、若干の違いがある。再版本第一冊「五言律詩」の内容や言語面の初版三冊との差も鑑みると、書肆側の意図の変化を考慮すべきだが^④、両版の差が寛政期→文政期の言語変化に因る例もあるだろう。

翻刻では、仮名字体を現行のものに改めるなど、底本を反映できなかった点もある。本書への注意を促す一助になれば幸いである。

注

- ① 本稿では、双行の小字をへ、改行を「/」で示す。
- ② ほかに『唐詩選和訓』に関する先行研究として、浅川（二〇〇八）、村上（二〇一三）に、小林高英の著作である点に注目した言及がある。
- ③ 今回確認できた初版本は、関西大学中村幸彦文庫蔵本のみ。再版本は、国立公文書館旧内閣文庫蔵（明治印）、早稲田大学図書館蔵（第二、四冊存）、架蔵（第一、二、四冊存）を確認、右三本は同版である。早稲田大学図書館蔵本は、同館「古典籍総合データベース」で閲覧した。同データベースで、今回翻刻した箇所に対応する再版本全頁の閲覧が可能である。

（資料紹介）高山房刊『唐詩選和訓（とうしせんききがき）五言絶句編（上）

④ 文政再版の題箋や表紙見返しには、「き、がき」の読みが示されない。再版本第一冊には、初版三冊に見られない、他の唐詩選注釈書の参照を促す文句もあり、再版本では、「師につき字びがたき人」に見聞を伝えるという意図は失われているものと思われる。再版本第一冊は他三冊と別に観察する必要がある。

参考文献

浅川哲也（二〇〇八）『唐詩選講釈』と『唐詩選広解』の指定表現について——近世口語資料としての再評価——『近代語研究』14

鈴木俊幸（二〇〇五）『経典余師』考、『一橋論叢』134-4

——（二〇〇六）『経典余師』考（続）『中央大学文学部 紀要・文学科』97

——（二〇〇七）『江戸の読書熱 自学する読者と書籍流通』平凡社

村上哲見（二〇一三）『中国文学と日本 十二講』創文社

山本佐和子（近刊）『高山房刊「唐詩選」関連書籍群における注釈表現の諸相』『国語語彙史の研究』38

〔付記〕貴重な文献の調査、翻刻掲載をご許可下さいました関西大学図書館に、記して感謝申し上げます。

本研究は、JSPS 科研費 JP17K13464 の助成を受けたものです。

翻刻

《凡例》

● 本稿は、高山房刊『唐詩選和訓』初版三冊のうち、第一冊「五言

絶句」の頭書を除く本文（漢詩・仮名書きの詩解）の翻刻である。

- ・紙幅の都合で今号では、四三首目「五叔が京に入るを送り奉りて、兼て碁母三に寄す」までを掲載し（『画本』第三冊目収載分まで）、以降は次号に掲載する。

- ・底本には、関西大学図書館中村幸彦文庫蔵本（24*1-1108*1、資料ID: 21019310）を用いた。

- ・漢詩は「」で囲み、仮名書きの詩解は、底本の小字双行を一行にした。改行は反映していない。

- ・丁の末尾に、「」で丁数を示した（例：二丁表↓【一オ】）

- ・漢詩一首ごとに通し番号を私に付した。

- 字体、符号、文字の用法について

- ・漢字、平仮名は、凡そ通行の字体を用いた。

- ・漢詩の訓点は、返り点は底本どおり、堅点は二字連結音読みのみを反映し、少数存する訓読み（左寄せの堅点）は省略した。

- ・詩解の振り仮名、および、仮名遣、濁点・半濁点、漢字表記と送り仮名、踊り字（くく・々）は底本に従った。

- ・底本では、句読点は全て「、」（読点）で示すため、一部を省略し、そのまま「、」を用いた。

唐詩選（五言絶句） 濟南李攀龍編選

- ①「題ニ袁一氏カ別業ニ」袁は姓、別業はしもやしき、

〔主一人〕亭主なり、〔不相識〕未知己にならぬと也、〔偶一坐〕

適然の義で、只何となく風景に對し樂み居こ、ろ也、〔為二也林一

泉〕林泉は山水のことで、山の麓のきれいな水も有処をいふ、

袁氏、風流人で此別業山水の佳風景の処にあり、賀智章亦風流の

詩人故、主人と知己でなければども、林泉の爲に行て樂まれたと見

ゑる、〔莫二愁一〕事沾一酒一〕 謾に、酒を沾など、心づかひな

されな、〔囊一中〕囊の中也、華人囊をさげて歩、和朝の詠諧人

のさげるふくろのごとし、〔自ラ有一錢〕自は自然の心で、思ふら

ず錢が囊の中にござる、是で調えまじよと、おかしくあいさつす

るが風流で、おもしろい、

- ②「夜一送ニ趙縦一」趙は姓、縦は人の名、此人故郷へ帰をおくる、

【一オ】

〔趙一氏連一城壁〕昔趙の国の王恵文王○下和の玉を持て居られた、

秦の国の昭王聞及て、城十五カ所と替て貰たといわれたゆへ、

玉の名を連城の玉と号た、此人趙氏ゆへ此故事をつかふた、〔由一

来天一下傳〕此玉の事は、天下の人聞つたへて居、そこもとの才智

も其玉の如く、人か知て居、この人をほめた、〔送三レ一君カ還ニラ旧

一府二〕君とは、趙縦をいふ、旧府は故郷也、ふるさとへかゑるを

おくるなり、〔明月満三前川〕玉の如くの才智有其元の旅立ゆへ、月もみちて、明かに、前川も輝くとなり、

③「易水送別」易は水の名なり

昔燕と云国の太子丹と云人、荆軻と云人を送来て此処で別をなし其時作られた歌に易水寒の辞がある、

〔此地〕易水のことしや、〔別〕燕丹、燕は国の名、丹は太子の名、荆軻、丹とこ、でわかれたといふことじや、〔壮士〕壮士とは、猛き士のこと、此では荆軻がことをいふ、〔髮衝冠〕髪すじが冠をつらぬくやうにあつた、〔一〕荆軻のいきほひをいふたものじや、〔昔〕昔といふこと也、〔人〕太子丹と、荆軻が事をいふ〔已〕没シ、死で果た〔今〕日水猶寒シ、今日は水が昔より猶寒か、そこもを送わかる、故ちや、人と別る、悲きてい也、

④「贈喬侍御二」喬ハ姓、侍御ハ官、〔漢庭〕漢の代の朝廷といふことちや、当代の事を直には作られぬ事を、古昔事にして作つたものじや、〔栄〕巧宦、利口に諂らふて、取入役人が、出世しさかへるといふことちや、〔雲〕閣、漢の代に、武功の有た人の像を尊で、朝廷の御座鋪へ画せをかれた御座敷の名ぢやによつて雲閣といへば朝廷のことじや、〔薄〕二功、二功は夷境の辺鄙までも行軍功を立てることちや、薄は厚くせぬ也、

〔可〕憐、聽馬、使、可憐とは、いとしいかなと云ことちや、聽馬

使とは喬侍御の事なれども是も昔の人になそらへたものしや、

昔後漢の代、漢天と云人、御史の官になられ聽馬にのりあるかれた器量人ゆへ、聽馬御史といふてこわがつた夫に劣ぬ喬侍御ゆへ、聽馬御史に当た〔二〕才、ものじや、〔白〕首、貴公は首はしらがあたまのこと、雄はいさましいといふことじや、貴公は

しらがなつても雄ましくしてござるは誰がためにそふしてござるぞ、当代はへつらい者はかり出世しさかへて、貴公のやうな器量人は、とりあぐる者もない可憐とか多りみるこゝろなり、

⑤「子夜春歌」樂府題也、子夜は女の名、夫をしたふたうたのていじや、

〔陌〕頭、道の頭の、〔楊〕柳、枝、いと柳の枝のたをやかなが、〔已〕被、春風ニ吹カ、春風に吹れなひくちや、此二句ハ風景をいふ、〔妾〕心口、妾は夫にたいしひげしたことは也、〔正〕断、絶ス、たゑ入はと夫かなつかしいとなり、〔君〕カ、夫をさして云、〔懷〕那、得、知事ヲ、何と思て居る、かとももしれぬが、さためて旅の事ゆへ、苦勞なことであらう、まして、こきやうのことなればかへりたいてあろとなり、

⑥「南楼望」南の方の楼にのぼりて、こきやうの方を望見なり

ことじや、〔登ル楼ニ〕楼たかののに登のぼば、〔万一里ノ春〕どこからどこま

でも春はるのけしきしや、〔傷シム心ヲ江一上ノ客〕客かとは、他国たこくから来人きたることとなり、江はつちの上うへの客人きやくをみるに、〔不ニ是故郷人〕一人も故郷

の人はないゆへ、心をいたむると也、
⑦〔汾一上驚秋ニ〕汾ふえは水みづの名ななり、早秋はやあきになつたかとをどろいた

なり、
〔北風〕冷風すずかぜなり〔吹キ白雲〕秋あきの雲くもをいふ、〔万一里〕遙はるく
遠とほく、〔渡ル河一汾ヲ〕此河このかほをわたる、〔心一緒〕いと口のむすばをれ

を旅たびの心こころにたとへたことじや、〔逢ニ揺落ニ〕木この葉はの落おちにあふて、
〔秋声不レ可カラ聞ク〕秋あきは唯たださへ物哀ものあはれなるに、旅たびゆへ、一入ひとしほかなし

うて、秋風あきかぜの音ねなどもどふも聞きれぬ、
⑧〔蜀一道後ル期ニ〕洛陽らくやうから蜀しやくへ行時ゆきとき秋あきにならぬ中に帰かへろふと思

た早秋はやあきに成なつと感かて作つく。
〔客一心争ニ日月〕旅たびはつらいものゆへ、一日いちにちも早はやう帰かへろふと月日つきひ

をあらそひ、〔来一往〕ゆき、の道みち〔三才〕中也ちゆう也、〔預メ期レ程〕
期き程ていは日限ひげん也、行時ゆきときかねて帰かへ日限ひげんを定め、秋あきにならぬ中ちゆう、かへ

ろふとおもふた、〔秋一風不相ニ待テ〕遅おそくなつたゆへ、秋風あきかぜはまつ

てはいぬ、〔先ツ至ル洛陽一城ニ〕わががからぬ先に、洛陽らくやうは秋あきの最

中ちゆうじやと也、
⑨〔照シテ鏡ヲ見ル白一髪ヲ〕かゞみにむかひ、白髪しろがみ首みを見てかんじ

て、作るなり、

〔宿一昔〕むかし、わかいしぶんは、〔青一雲ノ志〕青雲せううんは、出世しつせつ立

身みする事こと、〔蹉一跼タリ〕時節じせつにはづれ、〔白一髪ノ年〕ついでに頭あたま

なつてもふた、〔誰レカ知シ明一鏡裏〕誰たれか知らふ、此鏡このかみの中ちゆうをつ

らくなかくて〔形一影自ラ相ヒ憐シトハ〕うつる姿すがたと我われとみづから

あいあわれむやうにならふとは、
⑩〔同ニ洛陽李一少一府ト觀ル永一楽一公主ノ入レル蕃〕

李りは姓せい、少府せうふは官くわん、公主かうしゆは姫宮ひめみやなり、蕃ばんは夷国えいこくにの名ななり、とをき

へんぴへ、よめ入いれをみるなり、〔三ウ〕
〔辺一地鷲花少シ〕へんぴの遠とほき国くにゆへ、時とき候かうも正ただしくなひゆへ、

うぐひすも花はなもすくない、〔年一来レトモ未レ覚ヘ新ル〕さむいゆへ、

冬ふゆやら春はるやらしれぬ、年としの新あたらなもおほへぬなり、〔美一人天一上ヨリ

落〕うつくしい姫ひめみやを、天子てんしよりくださるゆへ、天上てんじやうから落おつ

にたとへ、〔龍一塞始テ応レ春ナル〕龍塞りゆうさいは、地ちの名な、ゑびすきんち

よでさむいところぢやが、此姫このひめみやの御ごよめいりで、始はじめて花はなのは

るのやうであるうとなり、
⑪〔静夜思〕樂府題也、夜よふけ人ひとしづまつてから、故郷こきやうをおもひ

だして旅たびのをもひを作る也、
〔牀一前看ニ月光〕牀ゆかの前まへを見みれば、月つきさえて、〔疑一々ハ是レ地上ノ霜〕

あまり明あきらかで、地上ちじやうが、白しろいゆへ、霜しもじやそふなと思おもつた、〔拳レ

頭ヲ望ミ山月ヲ 頭をあげてみれば、山の端の月さへたり、(低レテ頭ヲ思フ故郷ニ) よふけに、独月をみれば、ものさびしく故郷がなつかしいと、首をたれるなり、

⑫「怨情」宮女などの君のてうあいもとをとりへしゆゑ、うらめる心也、【4才】

〔美人捲珠簾ヲ〕美しい女が玉のすだれを捲あげ、〔深坐〕おくにござして、〔嗔蛾一眉ヲ〕其うつくしい眉の間に、しわをよせて、物思ていなり、蛾眉はかいこの蝶のまゆが美しいゆへ、眉の美を蛾眉といふ、〔但く見ル涙痕湿事ヲ〕但なみだ流たあとの、いまたかわかぬをみる、〔不レ知心恨誰ヲカ〕誰を恨て、なかる、やらしらぬと也、

⑬「秋浦歌」秋浦は地の名、李白、此時罪にあふて、この処へおひやられ、帰ことならぬを、朝夕歎て作る、

〔白髮三千丈〕さてく長い、なぜ長いぞ、〔縁愁似少個ノ長シ〕憂の有者は白髪が多いといふ、此やうにながく憂に居は、白髮三千丈もありそふなものぢや、〔不レ知明鏡裏チ〕鏡に貌をうつす也、〔何ノ処カ得ル秋霜ヲ〕鏡の裏が、まっ白に霜をおいたやうに白髪が見た、扱此霜は何処きた知ぬと知た事を作が趣向ぢや、

⑭「独坐敬亭山」独山の景色をたのしむなり、

〔衆鳥高ク飛シ尽シ〕多くの鳥が集が飛さつてしまふた〔孤雲独リ

去テ間也〕一村の雲が有【4ウ】たが是も散てしもふた〔相ヒ看テ両カラ不レルハ厭ハ〕相見ては山と我と也、不レ厭はあかぬ心なり、〔只く有ニ敬亭山ヲミ〕山は何処へもうこかぬゆへ有、我も見厭ず、何処へも不動、山を見居也、風景が勝れたといわずして其意あり、

⑮「見京兆」都のこと也〔韋〕姓也〔參軍〕官也〔量移スルヲ〕処かへして、遠國へやられることで流人なり、〔東陽ニ〕

〔潮水還テ帰レシ海ニ〕潮はさしても又、海へ帰る也、〔流一人却テ到レ呉ニ〕呉は国の名、東陽は呉に有、流人となり、東陽へ行れる、帰はしれぬ〔相ヒ逢テ問ハハ愁苦ヲ〕相逢て、さそいやて悲いことであるふと、問は、〔涙ハ尽ク日南ノ珠〕日南と云処の、鮫人の涙が珠になるといふことがある、此様に涙が出ては、玉も尽であらうと也、

⑯「臨高台」樂府題也、旅立を送て後、高き台に登り、ゆくさきをのぞみ見るなり、

〔相ヒ送テ臨ミ高台ニ〕相送てのちなごりおしこのあまり、高台から臨見は、〔川原杳トシテ何ソ〕極ニ山川原野を、杳かに越ていづくをかぎりとしれぬ、〔日暮飛鳥還リ〕日暮に成ば、鳥は皆飛かゑる、〔行人去テ不レ息〕行先遠きことなれば、日暮ても、未息まず、ゆかる、であらうとなり、

⑬「班婕妤」班は姓、婕妤は官の名、此人は賢女であつた、漢の成帝の御てうあひで有た、後御てうあひもとをとりへ、西宮に居られた、

〔怪来妝閣〕 けせうの間なり、〔閉事〕 なぜ妝閣の間を、明ずにくやら、〔朝ヨリ下テ不相迎〕 朝ていを下てから、御迎もなければ、妝もいらぬ、〔総テ向テ春園裏〕 総ての人がみな春の園に出て〔花一間笑語ノ聲〕 花の間に打ち寄、笑いつ語りつの聲が聞ゆると也、此中に恨の意自然とあり、

⑭「雑詩」 此詩多義にして、きつと題しにくいゆへ、雑といふ、

〔已ニ見ル寒梅ノ発クラ〕 最早、梅の花盛になつて、〔復タ聞ク啼鳥ノ聲〕 鶯なども囀る〔5ウ〕 月日のたつは早い、冬かと思へばもふ春者、〔愁心視ニ春艸ヲ〕 春草は面白いものなれども、不運で、愁心でみれば、〔畏向テ玉階ニ生ノ事ヲ〕 後にはいつかうな玉の階にも此草が生やうになるであらうと、代のうつりかわりがおもわれるとなり、君のてうあいがおとろへて、うれいうらむるこゝろにもなるなり、

⑮「鹿柴」 山中の閑静な風景佳ところに、あるは別業で鹿の多ところ、柴は山居のかきなり

〔空山〕 しづかな山と云心也、〔不レ見人ヲ〕 人の居は見ぬが、〔但ク聞ク人語ノ響〕 何処か、人の嘶聲がきこへる、〔返一景入ニ深

林〕 夕日影奥深林を照し入て、〔復タ照ス青一苔ノ上〕 また、青くとした、苔のうゑまでもてらし、おもしろき風景じやとなり、

⑯「竹里館」 竹林のうちに有家なり、

〔独一坐〕 ひとりで坐也、〔幽篁ノ裡〕 竹の茂て、幽な裡也、〔彈一琴復タ長一嘯〕 琴を弾したり、また〔6オ〕 口ふへをふいたり、〔深一人不レ知〕 深き竹林なれば、しつて来人もない、〔明月来テ相照ス〕 只月のみ来て、照すと閑静にたのしむなり、

⑰「長信草」 長信は、宮の名、大后の御殿じや、班女が君の御てうあいがなくなつてから居られた処じや、大后のことゆへ人がゆかぬから艸が生ずる也、其くさに題するなり、

〔長一信宮一艸〕 此宮へは来人少きゆへ、地上に艸がしげる也、〔年々愁一処ニ生ス〕 年々此面白ふもない処に生ずるぞ〔時二侵ニ珠履ノ跡ヲ〕 時く天子の玉の履をめて御幸ありし道の跡も艸で知れぬやふに生た、〔不レ使玉階ノ行ノ上カ〕 此様に艸が道を侵し、塞は、われを二度君の前へ行しめぬかとなり、うらみを艸によせていふ也、

⑱「少年行」 年若な人のうわきなてい也、〔6ウ〕

〔遣一却シテ〕 わすれたる也〔珊瑚ノ鞭〕 綺麗な赤い鞭也、〔白一馬〕 赤き鞭に、白馬奇麗な体なり、〔驕不レ行〕 馬は驕進んとすれども、若人行ざるなり、〔章一白〕 妓女など有処をいふ、〔折ニル楊

「柳」柳の枝を、手折てあそぶことなり、「春」日路「傍」情「春」の日の長くなり、のどかなをりふし、あそびありく情じやとなり、

②③「送」朱大カ入「秦」朱は姓、大は兄弟行の第一也、秦は長安也、

「遊人」朱大を云「五」陵「去」漢高惠、景武、昭の五帝を葬し

陵也、長安に有ゆへ、秦に入を五陵に去と也、「宝」劍直七千

金「千金」にも直る大事の宝物の劍「分」テ「手」別、別に臨て、

「脱」腰よりといて、「相」贈「進」進上いたす、「平」生「常」

「一片」心「足」下とは同服中で、魂を同じくする同心ゆゑ、をく

るといふこと也、俠客のまじわりなり、「7才」

②④「春」曉「春」の曉はねむたいといふが即起句なり、

「春」眠不「覺」曉「能」能ねて、夜の明るもしらぬ、「処」々「聞」啼鳥

処々ニ鳥が啼づるて目がさめたぢや「夜」来風「雨」聲「昨夜」はよ

もすがら風雨の音がしたが、「花」落「ル」事「知」ヌ多「少」花が多くちつた

であるふと也、只何ともなく浮世をかまわぬ隠者のていな、

②⑤「洛陽」訪「袁」拾「遺」不「遇」ハ「洛陽」は都也、訪は見舞こと

也、袁は姓、拾遺は官也、此人軽き役におとされ流人となり、行

れたあとにてあわぬなり、

「洛陽」訪「ハ」オ「子」袁氏をいふ、「江」嶺「処」の名也、「作」二流

人「流」され行れたなり、「聞」説「聞」伝て居也、「梅」花「早」上「暖」

て、梅の花が早いと也、「何」如「此」ノ地「春」たとい早いはなをみ

るとも、この方て遅い春のはなをみるやうにはおもわれまいと、流

人の心をさつしたものなり、「7才」

②⑥「洛陽道」都の道なり、貴公子の往來が多く花やかなてい也

「大」道直シ「まつ」すぐ也、「如」髪「ほ」そきことにあらず、直な

也、「春」日佳「氣」多シ「佳」氣は春陽の氣也、春めいたといふことじ

や、都はかくべつ春もすぐれて面白と也、「五」陵「前」にあり、

「貴」公「子」大名方の御公達、「雙」々「鳴」玉「阿」雙々はならび行

事也、貴公子がならひつゝいて、玉のかさりの馬具をならし、御と

をりじやはんくわなことをいふたものなり、

②⑦「長」安「道」みやこの道也、

「鳴」鞭「鞭」音にあらず、かざりのなる也、「過」二酒「肆」肆は店の

こと、若侍など馬にのつて酒を飲に料理酒肆へ行と也、「袷」

服「能」きいせう也、「遊」倡「門」倡門は遊女屋なり、能衣裳を着

て遊に行也、「百」万「多」くの金のこと也、「一」時「尽」多分の金を

暫の間につかいつくし、「含」レ「情」無「片」言「心」の【8才】中

にいろくとおもへども、あとへかゑらぬことなれば、一言もいはず

ににいるとなり、

②⑧「関」山「月」夷の境に有山の名也、此処へ中国より夷ともをおさ

へ二行居也、月を見て故郷都を思、悲おもふ体也、

「雁」過「連」營「一」ひとつはなれた雁がねが連た陣屋の上を飛行な

り、〔繁一霜覆二古城一〕繁霜は厚くおいた霜也、古き城の上に乗つしるにおいたと也、二句とも秋の季、冬のはじめのさみしきていをいふた者也、〔胡一筋在何ノ処二カ〕胡筋は夷狄の吹物也、何処でふくかしらねども、〔半一夜起二辺一聲一〕半夜は夜ふけをいふ也、蕭條、愁惨なしぶんゆへ、こきやうがなつかしく、かなしいに、よふけて、しつかなおりふしき、なれぬふきもの、辺鄙の聲をき、て、いよ／＼ものあはれになつたと也

⑲「送郭司倉」郭は姓、司倉は官也、

〔映レ門ニ淮一水緑也〕淮水の青くと緑色なるが、門にうつろふなり、〔留レ騎ヲ主一八ウ〕人ノ心、騎をとめて、しばらく待給へととむ、主人の心はあまり名残をしい故じや、〔明一月随ニ良掾一〕良掾は良下役といふこと、司倉のことじや、足下の行る、方八月はしたがいゆくが、をれはゆかれぬ、〔春一潮夜々ニ深シ〕別た後は、此春潮の満るやうに、いよ／＼おもひが、ふかくみつるであろうとなり

⑳「答三武一陵」地の名也、〔田一〕姓也、〔太一守二〕邦をつかさどる守なり、

〔仗一劍三〕けんを帯して、〔行三千里二〕遠く行なり、〔微一軀〕数ならぬ身と云こと、〔敢一テ一言セシ〕一言申上ふとなり、〔曾一テ為ニ大一梁ノ客一〕大梁は、魏の都のことぢや、昔魏の公子に信

陵君といふが有た、此人食客三千といふて、一器量ある者が行けば、みな客あいらいにしてをかれた、夫が三千人もあつたといふことじや、是を大梁の客といふ也、此句は太守を信陵君になぞらへ、手前を大梁の客にたとえたものじや、〔不レ負ニ信一陵ノ恩二〕信陵君の恩を、大梁の客が有難思た様に、貴公の御恩を私も有難存ますと也、〔9オ〕

㉑「孟城劫」むかし孟城と云城があつた、其跡也、劫は高ひ処の中を少しくぼくしてあることなり、

〔結ニテ廬ヲ〕廬を結なり〔古一城ノ下二ト二〕古き城の近所に別業を立をき、〔時ク登レ古城ノ上二〕時々城跡へ登り見る也、〔古一城非ニ曠昔二〕曠昔はむかしのこと也、〔今一人自ラ来一往三〕城は昔と替跡ばかり、其時の人も死でしまい今の人が往來するばかりじやと、代の移り替るを感たものぢや、

㉒「鹿柴」前に見ゆ、

〔日一夕〕日暮なり、〔見レ寒山ヲ〕冬枯の寂寥しき山なり、〔便一テ為ニ独一往ノ客一〕鹿柴へ独行して居なり、外より行居ゆへ、客といふたものじや、〔不レ知ニ松一林ノ事二〕松林の裏のことは何か存ずとなり、〔但ク有ニ麋麋跡一〕只見たものは麋と麋の足あとばかりじやとなり、山中の人もなき処に独居する、閑静のていなり、〔9ウ〕

㉓「復愁」前にも愁て、今又うれふといふことなり、

〔万国〕何国でもといふこと也、〔尚マ戎一馬〕尚々戎者どもが馬に乗軍じや、〔故一園〕故郷也〔今マ若何〕故郷は今の様子はどう何じやぞ、〔昔マ婦一相一識少也〕前方婦しときさへ、知己も少く成てあつた、〔蚤ク已ニ戦一戰場多シ〕故郷の方は、一番早く軍場か多かつた、今はさぞく軍ばかりであろう、相識もどふなつたか、前方婦たときさへ、少なかつた、今は一人もなくちりちりになつたであるふとなり、

③④「絶句」律は八句也、其を二つに絶きつて四句なり、

〔江碧ニシテ鳥遼く白ク〕江の水が青くみどりにて、鳥はいよく白く見ゆるなり、〔山青ニシテ花欲レ然ト〕山が青ゆへ、花の紅いが、火のもゑるやうじや、〔今一春看ク又タ過ク〕今春も又此見事な景色を見てすぎ行〔何レノ日カ是レ婦一年〕いづれの日にか、帰る年になることか、いく年もくも、この風景を【10オ】見てこきやうへ帰る日は来ぬかと、佳風景をみて、故園でみたなら、さぞ面白かるふと、かゑることを思ふとなり、

③⑤「長干行」江東の人、山瓊の間を干といふ也、此処舟つきて男女打混りて商ひする処なり、

〔君カ家住ニ何ノ処ニカ〕あなたはどこに御滞留して御さるぞや、〔妾住ニシテ横塘ニ〕妾とはてかけのことにあらず、女のてまへをひげしたことはぢや、横塘は女の住処、この女みづから居処を名のり、

（資料紹介）嵩山房刊『唐詩選和訓（とうしせんききがき）』五言絶句編（上）

旅客へとり入やうにする也、商人の常也、〔停テテ松ヲ暫ク借問ス〕舟をとめて、ちよつと御たづねもふします、〔或ハ恐ル是レ同郷ナララシ〕若故郷の御人ではないか、たしかこきやうの人のやうに存ますると、知己になるやうにしかけるてい也、女の方よりかくのことく、此詩世の淫風をそしつたものなり、

③⑥「詠史」史記の范叔がことを、吾身にたとへて詠ずる也、むかし、魏の国に范叔といふ人が有て、魏の中大夫、須賈と云人に奉公して居られた、此范叔大器量人なれども、須賈これをしらず、少しの不調法を【10ウ】とがめてた、きしが、范叔死だやうにしていられた、そこで厠の中へすて、しまふた、范叔そつとぬけ、逃出名をかへ、秦の国へ行奉公して、後は宰相とて、上もなき、重き官になられた、其とき須賈秦へ使者に行しが、范叔ひそかに軽き者の姿になり、須賈が居処へ逢に行れた、須賈范叔がさむそふな体を見て、わた入をくれた、さて夫より、宰相へ御めにか、りみれば、綿入をくれてやつた范叔であつた、大きに恥入たと云ことがある、此故事を詠じたもの者、

〔尚ヲ有ニ締一袍一贈ニ〕締袍のをくり物をしたと也、〔応レシ憐ニナル范一叔寒ニ〕范叔が寒そふなをみて、須賈が布子を遣れた、てうど、そのやうなことじや、〔不知三天下ノ士ナル事ヲ〕天下にすぐれた、器量の士成ことをしらず、〔猶ヲ作ニ布一衣ノ看ヲ〕やはり、いつま

でもこのいやしき身の上で居ておもうとおもふそうとなり、のちは高名の人にならふといふ心なり、

③⑦ 「田家春望」田舎の春の景色をなにかむるなり、【11才】

〔出レテ門ヲ何ノ所見ル〕 門を出て何を見ぞとおもふば、〔春一色満ニワ平一蕪ニ〕 春草が平地一めん、芽生、春の景色みちくた、〔可レシ歎ス無知一己ニ〕 嗚呼さんねんは、ねんごろな友がない世の人、器量をしらぬを、いきどをる心なり、〔高一陽ノ一酒徒〕 昔漢の酈食といふ人、高陽の一人の酒ずきじやといわれたが、てうどそれとおなじことで、ひとりのみじやとなり、

③⑧ 「行一軍」軍兵と成行也、〔九一日〕重陽〔思フ長一安ノ故一園ヲ〕故郷長安を思也、

〔強テ欲シ登リ高ニ去リ〕 重陽は高き処に登て、不祥をさくるといふことがあるゆへ、みな高き処へのほり、酒宴をすること也、此句強てとあるは、軍中ゆへ、のほる気もないをむりにのぼると也、〔無シ人ヲ送酒来ル〕 乱国のことゆへ、誰も酒をくれる人もない也、〔遙ニ憐ム故園ノ菊〕 遙かな、こきやうの菊をおもひあわれむ、〔応フ傍ニ戰場一開ケナル〕 乱世でも定めて戦場辺にひらいてあるであらふとなり、【11才】

③⑨ 「見テ涓水ヲ思フ秦川」涓秦ともに川のな也、

〔涓水東一流シ去ル〕 涓水はたへず、東へながれさるが、〔何時〕

いつ時分〔到シ雍州ニ〕 我こきやうの雍州へは流れゆくであるふ、〔憑テ添ニ兩一泪ヲ〕 故郷をなつかしくて、両眼から流れる涙を川水にそへて、〔寄テ向ニ故園一流シ〕 こきやうの方へながしやろうとなり、

④⑩ 「登ル鶴一樓ニ」鶴一樓といふ水鳥を、樓の屋根にくなり、よつて樓の名とす、

〔白一日〕 夕日のこと也、〔依レ山ニ尽ル〕 西山へ入尽るまで、みゆる也、〔黄一河入テ海ニ流ル〕 黄河は河の名、一番の大河也、ずつと海へながれ入までみゆる也、〔欲シテ窮ニ千里目〕 眼力のとどくだけ、見窮めやうとをもふて、〔更ニ上ニ一層ニ一樓ニ〕 層はかさなる義で二階三階の樓也、わざくこの樓にのほり見ると也、

④⑪ 「終一南望ニ餘雪ヲ」終南は山の名、餘雪は残雪也、長安よりのぞみみるなり、【12才】

〔終一南陰一嶺秀ツ〕 長安より南にあたる山也、陰嶺は峯のきたのかたをいふなり、〔積一雪〕 つもる雪也、〔浮一雲一端〕 高い山ゆへ、雲がかゝる、雲の端の雪がみへる也、〔林一表明ニ霽一色〕 林表ははやおどと、明ニ霽一色は、晴たる景色をいふなり、〔城一中増ニ暮一寒ヲ〕 城中は長安をいふ、長安は暖かな時分成ども、山の雪を見はぞつと寒い様者也、暮寒は暮春、暮秋など、云心で、季といふきみ也、余寒も季であった、かなじぶんをいふなり、

⑫「罷ヲ相ヲ作ス」相は官の名、天下の政をつかさどる重き官也、賢者でなければ成ぬ也、罷は退役する也、

〔避賢〕此賢は濁酒のことじや、昔魏の太祖の時、酒を停止のことがあつた、其時人がかくして飲時、濁酒を賢人と号、すみ酒を聖人と云たことが有、こゝも、濁酒をさるといふて、実は代の濁たを避といふことじや、〔初テ罷相ヲ〕代の人が濁たゆへ、避て退役するといふ心で、表は濁酒はきらいじやによつて、さるといふなり、〔楽テ聖ヲ且ツ街レム杯ヲ〕聖は清酒のこと也、清酒を樂み、杯を街といふて、実は聖人の道をたのしむために引籠と云心也、〔為二問也〕問て【12ウ】みるといふこと也、〔門一前ノ客〕門前まで機嫌窺に來人なり、〔今一朝幾一箇カ來ル〕今朝から幾人ほとみへたととふてみれば、一人もくる人はあるまいといふこと也、

⑬「奉レテ送リ五一叔カ入ルヲ京ニ兼テ寄ス慕一母一三二」五叔といふ人が京へ行く、をおくり、其ついでに友だちの慕母三といふ人へ言やるなり、三は兄弟行の第三番目也、

〔陰一雲〕薄曇なり〔帯ニ残一白ヲ〕残日は日入らんとして、残である也、夕方のこと也、〔悵別ヲ此レ何レノ時〕晴ぬ日の夕方はことに物哀なるに、足下とわかれるゆへ、かなしい、これはどふした時かと也、〔欲レニ望シト黄山ノ道ヲ〕此時慕母三、黄山に居す、慕母三のかたへ行道成とも、みやうと思へどもと也、〔無シ由レ見ルニ

所思〕おもふところをみるることかならぬと也、慕母三にあいとふても、あはれぬといふこゝろなり、《つづく》